

討論における中国人学習者と日本語母語話者の 不同意表明の仕方 —構成要素の観点から—

倉田 芳弥・楊 虹

1. はじめに

大学の授業において、留学生と日本人学生が討論や話し合いをする場面が増えており、接触場面の話し合いについて分析した研究も多く見られる(梶原 2003、佐々木 2005 等)。

梶原 (2003) は、アンケートの結果から、日本人学生との交流活動に参加する留学生 (うち 90%が中国人) の意見の述べ方が、日本人学生に「直接的な表現や自己主張が強くて少し怖い」(p.93) という印象を与えるとして、中国人学習者と日本語母語話者のコミュニケーション上の問題を指摘している。討論において、必要に応じて相手の見解とは異なる意見を述べることは、よりよい結論に到達するために重要である。しかし、表明の仕方によっては、相手の面子を脅かし、コミュニケーション上の問題が起こる場合もある。特に相手に不同意を表明する際には、対人関係への配慮も不可欠であると考えられる。そこで、本研究は中日接触場面の討論における中国人学習者と日本語母語話者の不同意表明に着目し、両者の不同意表明の仕方が異なるかについて明らかにすることを目的に分析を行った。

2. 先行研究

学習者の不同意表明の研究に、末田 (2000)、モンルタイ・楊・倉田 (2007) がある。

末田 (2000) は、韓国語母語話者学習者と日本語母語話者の不同意表明の発話機能について分析し、韓国語母語話者学習者には直接的不同意表明が多いと指摘している。モンルタイ・楊・倉田 (2007) は、先行発話との関連性及び不同意表明が明示的かどうかという観点から不同意表明について分析し、中国語母語話者である学習者は明示的不同意表現が多いと報告している。

上記二つの研究は、不同意を表す一発話を対象

として分析しているが、日本語母語場面の不同意表明に関する研究では、日本語母語話者は、複数の発話によって、不同意を表明していることが指摘されている(大塚 2005、梶本 1999、2004)。大塚 (2005) では、不同意を表すマーカに着目し、ターン冒頭にマーカが現れる場合、ターン途中にマーカが現れる場合、マーカがみられない場合にわけ、そこで見られる構成要素を抽出している。梶本 (1999) では、会話参加者間の上下関係によって不同意表明にみられる構成要素が異なることを指摘し、また梶本 (2004) では構成要素をもとに、提案から否定までの展開パターンを示している。

以上のように、日本語母語場面では、不同意を表明するという言語行動には、意見を伝えると同時に会話の相手への配慮を示す等、複数の言語行動により構成されることが明らかになっているが、接触場面ではこのような観点からの研究はまだ行われていない。そこで本研究は、不同意を表明するために行われる一連の言語行動を不同意表明の構成要素とみなし、接触場面における中国人学習者と日本語母語話者の不同意を表明する際の構成要素を詳細に分析することにより、両者の不同意表明の仕方の特徴を明らかにする。

3. 研究目的と研究方法

3.1 目的と課題

本研究では、接触場面の討論における中国人学習者 (以下 CL) と日本語母語話者 (以下 JNS) の不同意表明の仕方が異なるかどうか探ることを目的とし、下記研究課題を設け分析する。

課題 1. CL と JNS の不同意表明にどのような構成要素がみられるか。

課題 2. CL と JNS の不同意表明の構成要素に違いはみられるか。

3.2 データ

データは、中国の某大学で行われた課題達成型グループ討論6組（各グループCL2名、JNS2名、友人同士全員女性）の録音・録画資料（計115分）を用いた。討論の課題は、20分以内に「中国で日本人大学生を案内する場所を選ぶ」ことである。CL（CL1～12、計12名）は、日本語専攻4年生で、日本語のレベルは中上級である。JNS（JNS1～12、計12名）は当該大学の語学留学生であり、中国滞在歴は1ヶ月から1年である。

3.3 分析方法

まず、録音・録画資料から文字化資料を作成し、相手の見解や提案に対して、不同意の意向を表明する場面を認定し、この箇所を「不同意表明」とする。この「不同意表明」において、反論・問題点の指摘など否定的評価を下す発話、または議論を相手の見解や提案とは相反する方向に持っていく不同意の意向を示す中核となる発話を「不同意発話」とする。「不同意表明」をする場面及び不同意発話の抽出は、筆者ら2名が別々に行った上で、その結果をつき合わせ、一致しないものにつ

いては、協議して最終的に決定した。

課題1については、「不同意表明」において、不同意の意向を示す中核となる不同意発話の前後にみられる不同意発話者の発話を不同意発話前と不同意発話後として区分し、不同意発話とともに、大塚(2005)、根本(1999、2004)を参考に構成要素の分類を試みた。

課題2については、区分ごとにCLとJNSの不同意表明1箇所あたりの構成要素の生起頻度を算出し、CLとJNSについて構成要素の生起傾向を比較する。

4. 結果

4.1 不同意表明の構成要素

不同意表明は、CLでは25箇所、JNSでは24箇所みられた。構成要素については、まず不同意表明の中核となる不同意発話には、否定、否定理由、代案、代案理由、立場保留、立場保留理由の6つの構成要素がみられ、不同意発話前には、受け入れ、事実確認、判断保留という3つ、不同意発話後には、受け入れ、謝罪、評価、問いかけという4つの構成要素がみられた（表1参照）。

表1 不同意表明にみられる構成要素

	分類	定義	発話例
不同意 発話前	① 受け入れ	相づち（そうよね等）、相手に同意するもの	うんそうよね (G1 CL1)
	② 事実確認	事実に関する情報のやりとり	西安みなさんは 行った事がある？ (G6 CL11)
	③ 判断保留	相づち（あー/そうか）、繰り返し、いいよどみ等	そっか： (G2 JNS3)
不同意 発話	① 否定	直接的、間接的に相手の意見を否定するもの	北京じゃないほうがいいなやっは (G2 JNS3)
	② 否定理由	相手の意見に反対する理由を説明するもの	でも私、北京は行ったことがあるんだよね (G2 JNS3)
	③ 代案	相手の発話を否定せず代案を提示するもの	でも西安は良いと思いますが (G1 CL2)
	④ 代案理由	代案がよい理由を説明するもの	北京は北京は大学 (h) もっと多い (G5 CL9)
	⑤ 立場保留	「わからない」など立場を保留するもの	でもよくわからない (G1 CL1)
	⑥ 立場保留理由	立場を保留する理由を説明するもの	上海と西安は行ったことがないし：授業で習っただけだから (G1 JNS2)
不同意 発話後	① 受け入れ	相手の発話に同意するもの	でも今は現代の大 大都市として有名です (G4 CL8)
	② 謝罪	相手の発話に同意しないことについて謝るもの	申し訳ないけど hhhh (G6 JNS11)
	③ 評価	自分の意見について評価するもの	あればなんか大丈夫かなそう (G1 CL1)
	④ 問いかけ	相手の意見を求めるもの	〇〇ちゃん好きですか (G4 CL8)

4.2 不同意表明の各構成要素の生起頻度の比較

まず、CL と JNS それぞれの各不同意表明において中核となる不同意発話の各構成要素の生起頻度を図1に示す。

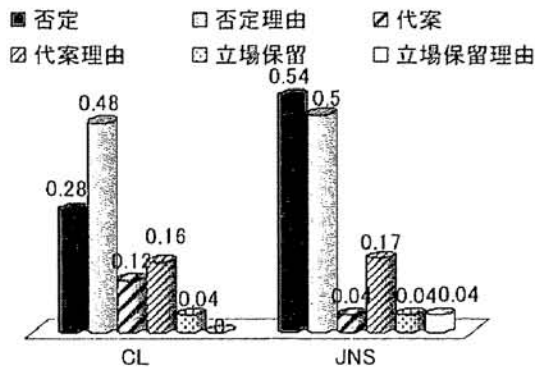


図1 不同意発話の各構成要素の生起頻度

接触場面の CL、JNS ともに否定と否定理由が多くみられ、各構成要素の生起率に関して CL と JNS には同様の傾向がみられる。しかし、1 回の不同意表明において、不同意発話に何種類の構成要素が使用されているかについて分析した結果、CL は 1 種類が 9 割を超え、2 種類は 8%にとどまるのに対して、JNS は 1 種類が 67%と多いものの、2 種類のものも 33%占め、CL と JNS には違いがみられた。CL は基本的に一発話により不同意発話を行うが、JNS は場合により複数の構成要素を組み合わせることで不同意発話を行うということが示唆された。

次に、不同意発話の前後における各構成要素の生起頻度をみてみる。

まず、CL と JNS それぞれの不同意表明における「不同意発話前」を分析した結果、CL には 40%、JNS には 42%の不同意表明に「不同意発話前」がみられる。各構成要素の生起率をみると、CL には事実確認が最も多くみられ、判断保留がほとんど行われていないのに対し、JNS には判断保留が最も多くみられ、両者に著しい違いがみられた (図2)。

□ 事実確認 □ 判断保留 □ 受け入れ

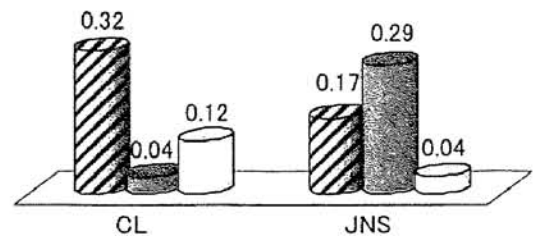


図2 不同意発話前の各構成要素の生起頻度

次に、CL と JNS それぞれの「不同意発話後」を分析した結果、CL は 12%、JNS は 25%の不同意表明に「不同意発話後」がみられ、CL、JNS ともに「不同意発話後」の生起率は低いことが明らかになった。生起する構成要素についてみると、JNS に最も多くみられる「謝罪」は CL にみられないという点が目を引く (図3)。

■ 受け入れ □ 評価 □ 問いかけ □ 謝罪

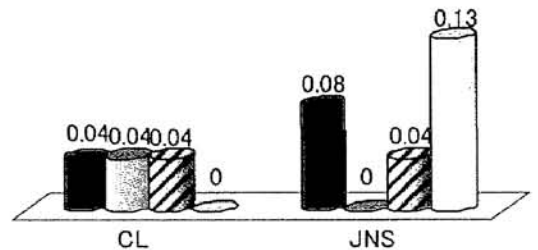


図3 不同意発話後の各構成要素の生起頻度

最後に CL と JNS それぞれの会話例を挙げながら考察する。

会話例1は CL が不同意を表明する会話例である。77 で、JNS7 が雲南省を提案し、その後、しばらく雲南省について話した後に、CL7 は 86 で「でも歴史はありません」と否定理由により不同意表明を行う。CL7 の不同意表明の後、JNS の 2 人は「あ:」と相づちを打ち、その後短い沈黙を経て話題が変わる。ここでは、「否定理由」の不同意発話のみ行われ、「不同意発話前」及び「不同意発話後」がみられないため、突然の不同意表

明として相手に断定的な印象を与える可能性が考えられる。

会話例 1 CL の不同意表明

(下線は不同意発話を示す、以下同じ)

77JNS7 次はなにかかな？私はなんか行ってみたいって いうのがなんか雲南省
(中略)

85JNS7 雲南省は

86CL7 でも歴史はありません

87JNS7 あ：

88JNS8 あ：
(1.5)

会話例 2 は JNS が不同意を表明する例である。瀋陽について話をしている場面で、JNS3 は 120 で、「瀋陽か」と判断保留し、「一箇所だけでしよう」と事実確認をした上で、122 で不同意発話に入る。不同意発話では、「一箇所だけ行くんだったら」と否定する理由についてまず述べ、次に「ちょっと瀋陽でもないかな」と否定している。不同意発話をした後、さらに「ごめんね」と謝罪し、瀋陽を提案（またはそれに賛同）した参加者に配慮を示す様子が窺える。

会話例 2 JNS の不同意表明

120JNS3 瀋陽か いやでもわたし瀋陽は
[一箇所だけでしよう

121CL3 [行きたい はい

122 JNS3 一箇所だけ行くんだったら
ちょっと瀋陽でもないかな

123 CL3 hh

124 JNS3 ごめんね

125 CL3 hhhh

5. まとめ及び今後の課題

本研究では、中国人学習者と日本語母語話者の不同意発話及びその前後の構成要素の分析を通して、両者の不同意表明の特徴を明らかにした。中国人学習者は不同意表明を簡潔に行い、討論にお

ける意見表明の仕方に事実関係を明確にすることを重視する事実志向が推察される。一方、日本語母語話者は、不同意発話を行う前にためらいを示す判断保留、不同意発話を行った後に、謝罪が行われるなど、対人関係に配慮しながら意見を表明する場合があります。討論への参加において、対人関係にも配慮する側面も見られる。

本研究では、中国人学習者のレベルは中上級であるため、得られた結果が日本語能力の制限によるものか、中国人のコミュニケーションのスタイルの影響を受けたものか、断言できない。今後は上級や超級など日本語能力が異なるデータ、中国語母語場面の討論のデータを収集し比較したい。

文字化資料の記号

会話例の左側の英数字は話し合いの発話につけられる通し番号及び発話者、[は発話の重なり、(数字) は沈黙 (() 中の数字は秒数)、h は笑い、: は音の引き伸ばしをそれぞれ表している。

参考文献

- 大塚淳子 (2005) 「不同意の表明—日本人大学生の場合」『日本語・日本文化』31号, 81-92
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117号, 93-102
- 佐々木泰子 (2005) 「討論における「じゃ」の考察—討論の談話とフォローアップ・インタビューの質的分析を通して—」『共生時代を生きる日本語教育—言語学博士上野田鶴子先生古稀記念論集—』(486-500), 凡人社
- 末田美香子 (2000) 「初対面場面における不同意表明と調整ストラテジー」『日本語教育論叢』16, 23-46
- 根本総子 (1999) 「会話者の力関係の調整—不同意から同意に至る連鎖を対象にして—」『日本語・日本文化研究』(9), 71-84.
- 根本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人の会話データを基にして—」『日本語学』23号 10巻, 22-33
- モンルタイ テンチャローン・楊虹・倉田芳弥 (2007) 「中日接触場面の課題達成型討論における反対意見表明の分析」『第16回小出記念日本語教育研究会予稿集』, 46-50

くらた かや/東洋大学 itky15@yahoo.co.jp

やん ほん/お茶の水女子大学 yang.hong@ocha.ac.jp